

## 佳作

### 寂しさから得たもの

秋田県鹿角市立十和田中学校

2年 兎澤 蒼士

家である出来事が起きた。その出来事で、私は夢を持つことや家族の大切さに気付くことができた。その出来事についてここで伝えようと思う。

私が小学校1年生の時、弟が病気になった。弟は、家から1時間ほどかかる大学病院に入院した。母は弟に付き添うことになった。私が学校から帰ると母と弟は、家にいなかった。父は夜も仕事をしていたので、私は祖母宅で過ごすことになった。私は誕生日を一緒に過ごせなかったことや、布団の上で泣いたこと、寂しかったことを覚えている。6カ月後、弟は退院した。やっと家族が揃い、とても嬉しかった。だがそんな時間は長くは続かなかった。退院から2カ月後、弟の病気が再発したからだ。また一緒にいられなくなると思うとても悲しかった。お見舞いに行くのにも、1時間ほどかかるのであまり行けなかった。病院のエレベーターで父が泣いていた。それを見て弟はいなくなるかもしれないと怖くなった。誕生日やクリスマスなど全てのイベントが家族と一緒に過ごせなかった。なぜこの家だけ、こんな大変な思いをしなければならないのかと思った。1年後弟は再発を乗り越え、家は賑やかになった。賑やかになったことは、「うれしい」でしか表現できないほどだった。

3年生になった頃。今度は、母が病気になり入院した。アルコール依存症の人がなりやすい膵炎と言われたが、母はめったにお酒を飲まない。原因はストレスだった。いつも、うるさくして母を怒らせ、困らせてばかりいた私が原因だったのかもしれないと、後悔した。私のせいで母が死んでしまうかもしれないと思いとても怖かった。1週間で母は無事帰ってきた。母にあまりストレスをかけないようにしようと思った。母の退院から3カ月後。弟の病気が再々発した。母から次再発したときの生存率は、10パーセント未満と教えてもらっていた私は、これから1回も会えずに弟は死んでしまうのかとても怖くなった。けんかなどせずに、もっと優しくすればよかったという後悔で頭がいっぱいになった。再々発から2カ月後。治療の合併症で脳炎になった。その時、弟の担当医が

「弟に会っておいで」

と言ってくれた。一度も入ったことがない病室に入ることができた。それはきっと、弟は死んでしまうからだろうと悟った。ベッドの上に座っている弟がいつもと違うのはすぐに分かった。弟に話しかけても、何も返してくれない。少

しも笑わない。目も合わせてくれない。そんな弟を見て、本当に弟は死んでしまうのかと、とても悲しかった。それでも、弟に会えて嬉しかった。弟に会っておいでと言ってくれた先生には感謝している。

4年たった今、後遺症で記憶障害はあるが弟はしっかりと生きている。脳炎前と全く違う弟だが生きているだけで、とても嬉しい。リハビリを頑張った弟は、泣く、笑う、怒る、喜ぶ、歩く、話す、食べる。いろいろなことが、できるようになった。命があるだけでも奇跡だが、弟が感情を取り戻したことは、奇跡だと思う。家族というものは、一緒にいるのが当たり前だといわれているが、大きな間違いだ。いつどこでどうなるかなど誰にも分からない。あのとき、弟は死んでいたかもしれない。父と母は、病気になっていなくなるかもしれない。そんなことを考えていてもきりが無い。考えるだけでは、意味がなくなってしまう。後悔しないためにどうするか。何ができるか。ここまで考えることが大切だ。

今の私ができること。それは家族との時間を大切にすることだ。ゲームをする時間を減らし、家族と会話する時間を増やしたい。人の命は、いろいろな人に支えられているものだと考えるようになった。私の命も、家族、友達、先生などに支えられている。目には見えないところで、私を支えてくれている人もいる。だから、私も誰かを支えられる人になりたいと思った。弟の病気を治すだけでなく、心のサポートまでしてくれた医師が今の目標だ。かなえるのはとても難しいが、今自分にできることを精いっぱい考えて一步一步近づいていきたい。

10年後の私へ。

あなたは元気ですか。私は元気です。家族も、とても元気です。母と父は、大切に私を育ててくれています。だから10年後の父と母には、たくさん親孝行をしてあげてほしいです。家族といる時間には、限りがあるということを、頭に入れておいてほしいです。夢はかなっていますか。かなっていると、胸を張って言うことができたら嬉しいです。かなっていなくても、私が誰かの支えになる人になっていることを願っています。人は、誰かの支えがなければ生きていくことはできないと、十分知っているはずだから。誰よりも。